

九州大学工学部 正員 榑木武

〃 学生員 林田紀雄

〃 〃 〇海江田光正, 国分信徳

1. 緒言 曲げを伴う圧縮部材 (beam column) の弾塑性安定に関する最近の研究において, 圧縮部材の耐力に影響を及ぼす因子として, 形鋼形成後の不均等冷却の結果生ずる残留応力や, 溶接組立で断面に生ずる残留応力が, 極めて重要であることが指摘されている¹⁾。また, 文献(2)によれば, ひずみ硬化の影響は, 細長比が約80以下となるような場合には無視できないとしている。(両端ヒンジI形断面では)したがって, はりの弾塑性安定問題を論ずる際には, 残留応力およびひずみ硬化の影響を同時に考慮することが望ましいといえる。しかし, 前者の場合には, その基礎式が極めて複雑となり, 容易に解析することが出来ない。一方, 著者は, Bar-Hinged System Methodにより, ひずみ硬化および残留応力の影響を考慮しない骨組構造の弾塑性安定問題も比較的容易に解析しうることを明らかにし, またその精度も十分高いことを数値的に確かめている³⁾。そこで, 本研究は, 著者の提案による Bar-Hinged System Method を用いて, 残留応力およびひずみ硬化の影響を同時に考慮するときI形断面ばりの弾塑性安定問題の解法を論ずるものである。

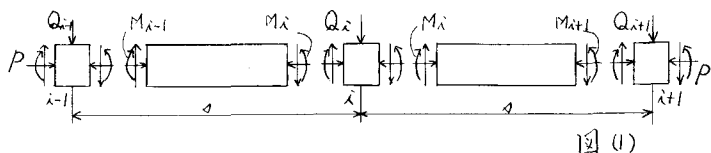
2. 基礎式の誘導 図(1)に示すように, 部材を適当な間隔(1)で分割し, 分割点を弾塑性ヒンジ, 分割点間を剛棒に置きかえてモデル化する。なお, その際, 次項を仮定する。(1) 剛棒は重さがなく変形しない。(2) 荷重はヒンジ部に集中して作用する。(3) 弾塑性ヒンジの部材軸方向の寸法は零である。(4) 応力とひずみはヒンジ部のみ生じ, これらの値はヒンジを挟む両区間の平均値と解釈する。

剛棒に関するモーメントの釣合

い式と, 弾塑性ヒンジにおける鉛直方向の力の釣合

い式から,

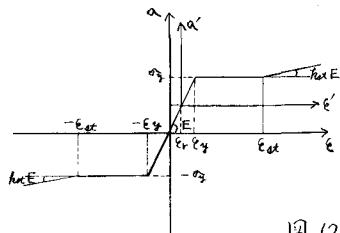
次式がえられる³⁾。



図(1)

$M_{i+1} - 2M_i + M_{i-1} - P(w_{i+1} - 2w_i + w_{i-1}) = -aQ_i$ (1) ここに, M_i , Q_i , ヒンジ点 i のたわみ, 曲げモーメントおよび鉛直力。また, 曲率 $\phi_i = -(w_{i+1} - 2w_i + w_{i-1})/a^2$ (2) のようにえられる。

軸力 P と曲げモーメント M により生ずる応力を σ , ひずみを ϵ とし, 部材断面に存在する残留応力を σ_r , 残留ひずみを ϵ_r とすると, 各ヒンジ断面に生じる総応力 (σ) は $\sigma = \sigma' + \sigma_r$, 総ひずみ (ϵ) は $\epsilon = \epsilon' + \epsilon_r$ となる。 $\sigma - \epsilon$ の関係として, 図(2)のような理想化された硬化弾塑性体モデルを用いるものとする。



図(2)

このとき, $\sigma - \epsilon$ 関係を $\sigma = l_1 \epsilon' + l_2$ (3) のように表現するものとする。勾配 l_1 および定数項 l_2 は各応力状態により次のごとくいえる。弾性域では $l_1 = E$, $l_2 = 0$, 塑性域では $l_1 = 0$, $l_2 = \pm \sigma_y - \sigma_r$, ひずみ硬化域では $l_1 = \sigma_u E$, $l_2 = \pm \sigma_u - \sigma_r - \sigma_u E$ ($\pm \sigma_u - \sigma_r$) (応力, ひずみは引張側を正, 圧縮側を負とする。)

いま、図 (3) に示すように、部材断面を I 形 (断面積を A) とし、その縦分割数を m 、フランジ横分割数を n とし、断面内の各要素は縦方向分割番号を添字 j で、横方向のもを添字 i であらわすものとする。このとき、点 i の任意の分割要素 j 点におけるひずみ ϵ'_{ijk} は次式で与えられる。 $\epsilon'_{ijk} = \epsilon'_{i0} - \phi_i z_j - (4)$ (ここに、

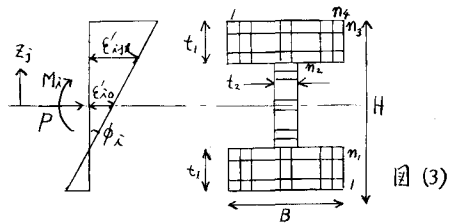


図 (3)

z_j : 断面中央軸から分割要素までの距離, ϵ'_{i0} : ヒンジ点の M_x, P による中央軸上の付加ひずみ) 他方、断面に関する釣合条件から、 $P = -\sum_{j=1}^m \sum_{i=1}^n A_{ijk} \phi_{ijk}$, $M_x = -\sum_{j=1}^m \sum_{i=1}^n A_{ijk} \phi_{ijk} z_j$ (A_{ijk} : 分割要素 j 点の面積) をうる。(ここに、 $m_1 < j \leq m_2$ では $l = 1$, $1 \leq j \leq m_1$ 或 $m_2 < j \leq m_3$ では $l = m_2$ である。) 上記二式に式 (4), (5) および式 (4) を代入すれば、ひずみ ϵ'_{i0} およびモーメント M_x とたわみ δ_i の関係が導かれることになる。

$$\delta'_{i0} = \left\{ -P + \mu \phi_i \left(\sum_{j=1}^m A_{ijk} \bar{z}_j + k_{el} \sum_{j=1}^m A_{ijk} \bar{z}_j \right) + \left(-\sum_{j=1}^m A_{ijk} \text{sign}(\delta_{ijk}) + k_{el} \sum_{j=1}^m A_{ijk} \text{sign}(\delta_{ijk}) \right) + \left(\sum_{j=1}^m A_{ijk} \delta_{ijk} - k_{el} \sum_{j=1}^m A_{ijk} \delta_{ijk} \right) \right\} / \left(\sum_{j=1}^m A_{ijk} + k_{el} \sum_{j=1}^m A_{ijk} \right)$$

$$m_i = Y_i - \beta_i (Y_{i+1} - 2Y_i + Y_{i-1}) - (5)$$

$$Y_i = Y \left\{ C_i P - \sum_{j=1}^m A_{ijk} (\bar{z}_j - C_i) (\text{sign}(\delta_{ijk}) - \delta_{ijk}) + k_{el} \sum_{j=1}^m A_{ijk} (\bar{z}_j - C_i) \text{sign}(\delta_{ijk}) - k_{el} \sum_{j=1}^m A_{ijk} (\bar{z}_j - C_i) \delta_{ijk} \right\}$$

$$\beta_i = \frac{Y \mu n^2}{d} \left\{ \sum_{j=1}^m A_{ijk} \bar{z}_j (\bar{z}_j - C_i) + k_{el} \sum_{j=1}^m A_{ijk} \bar{z}_j (\bar{z}_j - C_i) \right\}$$

$$C_i = \left(\sum_{j=1}^m A_{ijk} \bar{z}_j + k_{el} \sum_{j=1}^m A_{ijk} \bar{z}_j \right) / \left(\sum_{j=1}^m A_{ijk} + k_{el} \sum_{j=1}^m A_{ijk} \right)$$

ここに、 $m_i = M_i / W_{0i}$, $P = P / A \sigma_s$, $A_{ijk} = A_{ijk} / A$, $\delta_{ijk} = \epsilon_{ijk} / \epsilon_s$, $\delta'_{i0} = \epsilon'_{i0} / \epsilon_s$, $\delta_{ijk} = \epsilon_{ijk} / \epsilon_s$, $\bar{z}_j = z_j / H$, $Y = HA / W$, $\mu = \phi_2 H / \epsilon_s$, $\phi_i = \phi_i / \phi_2$, $\phi_2 = M_y / EI (M_y = W_{0y} \sigma_s)$, $Y_i = W_i / H$, $d = \sqrt{\lambda^2 W_y / YE}$ n : 部材の軸方向分割数, λ : 細長比, W : 弾性断面係数

式 (4) を無次元化した式に、式 (5) を代入すれば、弾塑性安定問題に関する基礎式が導かれ、次のようになる。

$$A_{i-2} Y_{i-2} + A_{i-1} Y_{i-1} + A_i Y_i + A_{i+1} Y_{i+1} + A_{i+2} Y_{i+2} = B_i - (6)$$

$$\text{ただし、} A_{i-2} = -\beta_{i-1}, A_{i-1} = 2(\beta_{i-1} + \beta_i) - Y P,$$

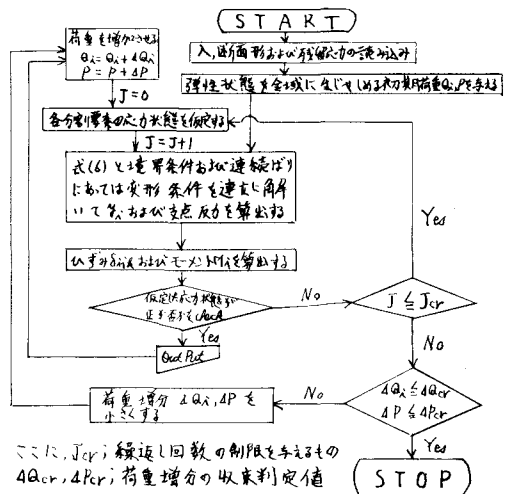
$$A_i = -(\beta_{i+1} + \phi \beta_i + \beta_{i-1}) + 2 Y P,$$

$$A_{i+1} = 2(\beta_i + \beta_{i+1}) - Y P, A_{i+2} = -\beta_{i+1},$$

$$B_i = -\lambda \sqrt{AI} Q_{i-1} / n W Y_s - (Y_{i+1} - 2Y_i + Y_{i-1})$$

本法の計算手順は図 (4) に示すとおりである。

なお、計算例については、講演時に発表の予定である。



ここに、 J_{cr} : 繰返し回数の制限を与えるもの
 $4Q_{cr}, 4P_{cr}$: 荷重増分の収束判定値

図 (4)

(参考文献)

- (1) 坂本順・宮村篤典・渡辺雅生; 鋼構造圧縮材の塑性耐力式に関する考察
- (2) 華間孝志; 偏心圧縮柱の荷重・変形性状に与えるひずみ硬化の影響
- (3) 樽木武・林田紀雄; 層組構造の弾塑性安定に関する基礎理論